

徳と技能について : ヒューバート・ドレイファスの 徳倫理学の可能性

丸山, 望実
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7392672>

出版情報 : 哲学論文集. 61, pp.27-45, 2025-09-27. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン :
権利関係 :



徳と技能について

ヒューバート・ドレイファスの徳倫理学の可能性

丸 山 望 実

はじめに

本稿の目的は、ヒューバート・ドレイファスに基づく徳倫理学を批判から擁護し、検討することである。本稿では、徳倫理学の中でも徳を技能とのアナロジーで理解する方針を採用する。マット・ステイクターによると、技能の解釈の違いに基づいた二つの立場がある。第一の立場が「知性主義 (intellectualism)」と呼ばれる立場である。知性主義者は、技能としての徳を獲得し行使するためには、個々の行為を導く普遍的な原理の把握が必要だと考え、このような知的な要素が技能や徳には必要だと主張する。第二の立場が「経験主義 (empiricism)」である。経験主義者は、技能としての徳には知性主義が想定する原理のようなものは必要ないと考える。むしろ徳や技能の獲得には、実際の試行錯誤が重要とされる。

経験主義は、現代の技能に関する研究と整合的だという長所を持つ。この現代の研究として挙げられるものの一つが、ドレイファスの研究である。ただしステイクターやマーク・クーケルバーグは、彼の技能論は魅力的ではあるものの、道徳に

関する概念である徳の説明として不十分な点があると批判する。

この批判に対して本稿では、ドレイファスの技能の熟達段階をめぐる議論に注目して検討を行う。このことを通じて、ドレイファスに基づいた経験主義を擁護する、すなわちドレイファスの枠組みの内では批判には応答可能であることを示す。この議論によって、ドレイファスに基づく徳倫理学がなお検討に値することを示すのが本稿の目的である。

したがって本稿は、以下のような構成である。第1節では、知性主義と経験主義を概観する。第2節では、現代の技能研究に基づく経験主義を検討する。ここでは、ドレイファスの研究を挙げた上で、彼に対する批判を確認する。第3節では、ドレイファスの他の研究に言及しつつ上記の問題点を説明することで、彼に基づく経験主義を再構成する。

1. 徳をめぐる知性主義と経験主義

本節では知性主義と経験主義について、ステイクターによる先行研究に基づいて整理を行う。また、それに先立ちジュリア・アナスらの議論に依拠しながら、徳や技能が持つ代表的な特徴を確認する。

1-1. 徳の持つ諸特徴

近年、徳に関する研究は様々に関心を集めている。アナスはこのような徳理論の間にも対立が存在し、それは「徳とは何か」についての共通理解が存在しないためだと考える。そのため彼女は、この点を解決するために徳の本性をめぐる問いに答える必要があると考える¹⁾。

そしてこの点について彼女は、徳と技能の類似点に着目するのが有効だと考える。とりわけ古代において、徳は技能とのアナロジーで理解されていたためだ。また、このような背景以外にも、技能とのアナロジーは徳の持つ次のような特徴を捉

えることができると考えられている。^②

例えば気前のよさという徳は、人に備わる特性とされる。また、その特性は一定の仕方で行為する傾向性をもたらす。したがってある人物が気前のよさを備えるためには、単に気前のよい行為をするだけでも、またそのような感情を持つだけでも不十分である。というのも、気前のよい行為をするだけならば「よい印象を与えたい」ために、いつもの態度を抑えているに過ぎないかもしれない。あるいは、気前のよい感情を持つだけで行いを伴わなければ、その人を気前のよい人物とみなすことはできない。したがって徳は、その人の特性として存続し行いと結びついていなければならない。

また、徳は成長するという特徴も持つ。この点から、徳がもたらす傾向性は単なる科学的なものと異なる。例えばガラスは「一定の状況において割れる」という傾向性を持つが、ガラスの傾向性は成長しない。他方で徳という傾向性は、様々な実践を通じて強まったり弱まったりする。このような習熟はまた、技能と同様に、誰かに教わることでより効果的になるとが期待される。

そして徳には、価値が認められているという特徴もある。すなわち、私たちは徳や技能を有する人を称賛する。この時私たちは、個々の有徳な行いを称賛するのではなく、そのように振舞う行為者本人を称賛している。

上記の点は技能にも当てはまる。例えば車の運転という技能は、それに関する行為を可能にする。この技能は、運転を構成する様々な行為を促す傾向性の一種である。この傾向性は、最初は「急に踏む」という行為を促していたが、運転の練習を積むことで「緩やかに踏む」という行為を促すように変化しうる。すなわち「急に踏む」傾向性が弱まり「緩やかに踏む」傾向性が強まっていく。これは、運転の技能の成長として捉えることができる。またこの成長は、同乗者に指摘され教わることで効果的になる。そして私たちは、そのような技能を有することに価値を認め、称賛する。またそこでは、アクセルやブレーキを適切に踏むという個々の行為ではなく、そのような技能を持つ運転手を称賛している。

1-2. 知性主義について

このように徳は技能と多くの共通点を持つことから、技能とのアナロジーによる理解が試みられている。まずは、そのうちの知性主義と呼ばれる立場について見ていく。スティクターによると知性主義は、徳と技能は次の三つの特徴を有すると主張する^③。

1. 技能は教えることができないからならぬ
2. 熟達者の技能に内在する (underlying) 統一的な原理 (unifying principle) が存在する
3. 熟達者は、技能的な行為について説明ができなければならない

第一の「技能は教えることができないからならぬ」という特徴は、私たちは何かを学ぶことで熟達者になるという点に由来する。知性主義によると、熟達者になるためには、技能的振る舞いの背景にある理論を学ぶ必要があり、熟達者はその理論を他の人にも教えることができないからならぬ。

この特徴づけは、ソクラテスによるコツ (track) と技能の対比に由来する。コツは、単にやってみることで得られるものであり、技能の持つ理論といった知的な構成要素を欠く。知性主義によると、真なる技能とはコツとは異なっており、知的な構成要素を含むものであり、熟達者はこの要素を他者に教えることができないからならぬ。

第二の「統一的な原理の存在」という特徴は、この知的な構成要素の存在と関連する。知性主義によると、技能には「その領域に関する統一された把握」が必要となる。そしてこの主張は、特定の技能に関する領域を統一する原理が存在するということを含意しており、熟達者はこのような原理を把握している。

この特徴は、技能を持つためには一部のことができるだけでは足りないという点を反映している。というのも技能を持つ

人は、初めての状況でも適切に行為できなければならぬためだ。例えば、教習所の中だけでしか運転をしたことがない人は、そこでどれだけうまく運転できたとしても技能を持つとはみなされない。私たちは見知らぬ土地でも適切に運転できて初めて、技能を持つと認められる。そして知性主義は、初めての状況で適切に行為するためには、それを可能にする統一の原理が必要だと考える。

第三の「熟達者は説明ができなければならない」という特徴もまた、技能に含まれる知的な構成要素に基づく。この時知性主義は、技能を有する熟達者に対して、自身の行為や判断を明確に説明し、正当化することを求める。すなわち熟達者は、自身の行為の理由を明示的に示すことができなければならない。またその説明は、技能の学習の際に習得した原理を反映していなければならないと知性主義は考える。⁽⁴⁾

このように知性主義は、技能が学習され、またそれを伝えることができなければならないと考えている。そしてそこで学習されているのは、関連する諸々の行為を可能とする統一的な原理であり、その原理は技能を構成する知的な要素となる。また熟達者はそのような原理に訴えることで、行為を正当化できなければならない。

1-3. 経験主義について

知性主義は技能の獲得のために、様々な状況で用いうる普遍的な統一的原理の把握が必要だと主張する。したがって、技能はコツと異なる。というのも、コツを可能にする単なる経験はそのような要素を含まないためだ。これに対してステイクターは、知性主義と対立する経験主義的な見方の存在を指摘する。彼はアリストテレスをこの見方の代表とみなす。

アリストテレスは、徳は習慣づけによって獲得されると主張する。この習慣は、行為の繰り返しによって獲得され、経験と時間が必要となる。そして彼は、技能もまた行為の積み重ねによって獲得されると主張する。例えば大工は一定の規則を学習するだけでなく、実際に家を建てることによって熟達した大工になることができる。私たちはこのような実際の活動な

して、技能を習得することはできない。この習慣と経験の重要性をアリストテレスは、徳と技能に共通すると考えていたとステイクターは指摘する^⑤。

そしてこのような習慣や経験の重要性を指摘する際、アリストテレスは、徳や技能的な行為の記述は、大まかなものにならねえなと考えている。そのため技能の習得には普遍的な原理の把握ではなく、試行錯誤を伴う経験が必要である。したがって彼の議論はまた、徳や技能が統一された原理の把握に基づくという説明と一致しない。これらの点から彼の徳理解は、知性主義と対立するとみなされる。このように経験主義は、知性主義が必要と考える原理の存在を否定し、試行錯誤することを通じて経験によってこそ技能は獲得されると主張する。

2. 現代の経験主義

徳を技能とのアナロジーで理解する立場は、知性主義と経験主義に分かれる。知性主義は、技能の獲得や行使において統一的な原理の把握が不可欠であると考えていた。経験主義は原理は必要なく、試行錯誤や経験が重要であると主張する。

そして経験主義は、現代の技能をめぐる研究によっても支持される。クーケルバーグがアナスの知性主義的な立場を批判する根拠の一つに、彼女が古代の議論を重視しすぎるあまり、現代の技能をめぐる研究に十分目を向けていない^⑥というものがある。クーケルバーグはいくつかの研究に言及するが、本稿では特にドレイファスの研究に注目する。

またステイクターは、クーケルバーグと同様にドレイファスに注目しつつ経験主義を検討している。しかし彼らは、ドレイファスの技能に関する洞察は優れているが、徳とのアナロジーとしては不十分な点があると指摘する。本節ではドレイファスの技能論を確認し、徳倫理学に適用するにあたってどのような批判が存在するか確認する。

2-1. ドレイファスの技能論

ドレイファスは技能の行使を「没入的対処 (absorbed coping)」と呼ぶ⁷⁾。技能の行使である没入的対処の典型例として考えられるのは、テニスの試合中にボールを打ち返すことや車の運転などがある。ドレイファスはこのような行為において、身体は最適なゲシュタルトからの逸脱の感覚を引き下げようとして動くよう導かれていると主張する⁸⁾。ただし行為者は、事前にこの最適さがどのようなものかを知ることではない。例えばテニスの技能を有する人は、試合中ボールを打ち返す際に、最適なラケットの構え方や腕の振り方を現実化する必要があり、テニスの技能とはそのような振る舞いを現実化する傾向性である。ドレイファスによると、この時の行為者はただその場の感覚にしたがって身体を動かしているのであり、前もって「○○度でラケットを構えよう」といった意図や心的表象を抱えていることはない。彼はこのとき「没入的対処において、行為者は成功状態に到達しようと努めるのではなく、ただ最適な均衡に向かって引き寄せられるだけでよい」と述べる⁹⁾。

したがって初心者と熟達者は次の点で異なる¹⁰⁾。運転の初心者には「自分が今カーブに差し掛かっている」ことを認知し「カーブの際は安全のためにスピードを落とせ」という一般的な原理にしたがってどうすべきか熟慮し「ブレーキを踏もう」という意図を形成しブレーキを踏む必要がある。この時初心者は、実際に身体を動かすのに先立つ意識的な熟慮や意図に基づいて行為をしている。

それに対して熟達者は、次のように技能的に振る舞う。熟達者は自らの振る舞いに注意を払ったり、原理を用いた熟慮や意図に基づいて身体をコントロールする必要はない。熟達者は、ただその状況の感覚に応答して端的に行為をしている¹¹⁾。熟達した運転手は、カーブに差し掛かれば、その道路や運転している自身のスピードの感覚に応じて非意識的にブレーキやアクセルの調整を行う。したがって熟達者の行為の最中には、初心者の行為を導いていた熟慮や意図、またそこで用いられていた一般的な原理は不要となる。

2-12. 先行研究における批判

ステイクターは、ドレイファスに基づく経験主義には問題があると考える。¹²⁾ それは彼の技能論が、徳の重要な側面を見逃してしまつたためだ。例えば、有徳な人は実際に善い行為をするが、私たちはその人に対して、行為の理由を明確化し説明することを期待する。しかしドレイファスは、技能にかかわる知的な構成要素の存在を否定するため、そのような説明ができないのではないかという問題点が指摘されている。

同様の点は、クーケルバークによつても指摘されている。彼はドレイファスが、行為の社会的な文脈を踏まえていないと批判する。この時彼は、ドレイファスが技能にかかわりうる熟慮をすべて否定するのは誤りだと考えている。¹³⁾ そしてクーケルバークは、他者との会話や抽象的な原理は、技能的な振る舞いを手助けすると指摘する。すなわち、標識といった様々な道具が車の運転を手助けするのと同様に、他者との会話や熟慮もまた、徳の発揮となる振る舞いを手助けすると彼は指摘する。

対話や熟慮の重要性は、道徳の問題で特に重要となる。例えば私たちは社会的な問題に直面した際に、対話を通じた共同的な意思決定を必要とする。また、何が有徳な振る舞いとみなされるかは、共同体と深い関係にある。したがつて徳は、ドレイファスのように個人の経験やノウハウだけで説明されるべきではないと指摘される。また彼が技能から排除する熟慮や信念は、共同体とのかかわりにおいて重要ではないかと指摘される。というのも共同体を維持するためには、実際に命題的な信念や原理を発言することを通じた対話が必要になるためだ。

これらの問題点は、ドレイファスの技能論を徳倫理学に応用する際に生じる。例えばチェスの熟達者が、ある一手を指したのちに「そうするのがいいように感じたためだ」と理由を述べたとしても、ゲームに勝利している限り不満はない。しかし今回検討している徳に関する行為には説明の要求が高い。特に、道徳的な衝突が生じている際にはその要求が高くなる。すなわち私たちは、そのような状況では明確な説明を求める。そしてそのためには、ドレイファスの技能理解では不十分だ

と指摘される。

以上のように経験主義は、現代の技能をめぐる研究によっても支持される。しかしながら、ドレイファスの技能論を徳に応用する際には不十分な点があると批判されている。というのも、行為の説明や他者との対話を可能にする要素は徳にとって重要であるためだ。すなわち、確かに徳や技能にとって知性主義者が想定する一般的な原理は不要だが、ドレイファスはこのような原理が関わる可能性を全て否定してしまっているように思える。この主張は行き過ぎであり、説明や対話を可能にする知的な要素が必要ではないかと批判される。

3. ドレイファスに基づく経験主義

ドレイファスに基づく経験主義には、次のような批判があった。第一に行為には理由を提示することを通じた正当化を必要とするときがあるが、彼のモデルには正当化のための知的な要素が欠けているというものがある。第二に他者と対話をする際に原理を用いた熟慮や信念が必要になるが、彼はその点を考慮に入れていないと批判される。また原理は技能にとって有用であり、その存在をすべて否定すべきでないと批判される。

本節では批判にドレイファスの枠組みから応答することで、彼に基づく経験主義を擁護する。

3-1. ドレイファスの技能の熟達モデル

本節では批判に応答するために、ドレイファスは初心者が実践を積みこで技能に習熟していくと考えていた点に注目する。また彼は倫理的な熟達を、他の技能の熟達と同じように説明できると考えている¹⁴。そして熟達の途中段階では、主体の持つ原理や意図が重要になる。

2-1で確認したように、ドレイファスによると初心者とは、特定の原理を用いた熟慮を通じて意図を形成し、それに基づいて行為する必要がある。したがってこの時、意図が行為に関与する際には、一般的な原理もまた行為を引き起こすプロセスの内で役割を果たしている。そしてこのような実践を積むことで、行為者は技能を身に着ける。熟達した後の行為者は、原理を思い浮かべ意図を形成する必要はなく、その場の感覚に導かれているというのが彼の技能論であった。

ドレイファスは同様のことが、道徳の熟達にも当てはまると考える。彼はある文化で道徳的に善く行為する仕方に精通していない子供を、道徳的な行為の初心者とみなす¹⁵。そして子供はまず「嘘をつくな」といった、一般的な原理を学び行為する。その後子供は、様々に実践を積む。そうすることで例えば、単に嘘をつかないだけでなく、トラブルに巻き込まれないためにも「遊びに行った友達の家から帰るときは、実際はそうでなかったとしても「楽しかった」と言いなさい」といった例外的なルールを獲得していく。

このようにして子供は、嘘をつくべきではない状況がある一方で、嘘が必要な状況もあることを学ぶ。そしてドレイファスは、このような状況が様々にあること、またそこには数えきれないほどの関連する情報が存在することを指摘する。彼によるとこの複雑な状況にスムーズに対処するためには、抽象的で一般的な原理では間に合わない。

そのため熟達者の段階に達した子供は、原理に訴えることなく状況に応じて真実を語ったり嘘をついたりする。これは誠実さの徳の獲得とみなされる。このようにドレイファスは、初心者にとっては原理や意図といった一般的で抽象的な要素が重要だが、実践を積んで熟達者に達したのち、それらは必要なくなると考えていた。

しかしドレイファスによると、熟達者も原理を用いた熟慮を通じて意図を形成することがある。それは、熟達者の行為が「故障状態」に陥ったときである¹⁶。例えば運転手は、ブレーキが故障した際に「フットブレーキが利かないならサイドブレーキを引けば減速する」という原理やそれに基づく「減速するためにサイドブレーキを引こう」という意図にしたがって行為する必要がある。なお熟達者の行為は、このような原理と意図に基づく行為によって故障状態を脱した後には、再び非意識

的なものとなる。

技能の行使を妨げる故障状態は、徳に基づく行為の場面にも起こる。いつも通りの仕方で行為をしているとき、例えば「嘘をつかない」仕方で行為をしているときに、相手が傷ついた表情をしているとする。この時行為者は「遊びに行った友達の家から帰るときは、実際はそうでなかったとしても「楽しかった」と言いなさい」という原理を思い出し、それに基づき「本当の気持ちは隠して「楽しかった」と言おう」という意図にしたがって行為する。

ドレイファスの行為論の特徴は、熟達者の技能的な没入的対処という感覚によって導かれる非意識的な行為の仕方と、初心者の原理を用いた熟慮と熟慮を通じて形成した意図によって導かれる意識的な行為の仕方が切り替わると考えている点にある。そして、非意識的な仕方から意識的な仕方に移るきっかけの一つが故障状態であり、意識的な仕方から非意識的な仕方に戻るためには原理や意図が必要になる。

ステイクターらは、熟達した後の振る舞いに関するドレイファスの議論にのみ注目している。しかし彼の議論には、熟達段階や故障状態など様々なものが含まれる。これらに再注目することで、批判に応答を試みる。

3-2. ドレイファスに基づいた経験主義

ここからは、第2節で確認した批判に応答していく。第一に、行為には正当化が必要だというものがあった。この正当化は、熟達者は故障状態において原理に訴える必要があるというドレイファスの考えから主張できる。故障状態は道具にトラブルが発生した時だけでなく、行為の中断を余儀なくさせるような状況、例えば「なぜそのようにしたんですか?」という問いに直面した際にも起こる。

ステイクターが求めている行為の正当化は、この「なぜ?」という問いに答えることを意味している。そして行為者は、自分が置かれている状況を説明し、そこで採用していた原理を提示することで、自身の振る舞いを正当化できる。この正当

化は単なる説明では不十分だというのが、道徳的な行為の特徴だろう。すなわち「なぜ嘘をついたのか？」という問いに「あいつに損をさせたかったからだ」と答えるのは、振る舞いを理解可能にしている。しかしこの理由では、行為は道徳的に受け入れ可能なものとして正当化されない。

ここで注目すべき点は、ドレイファスが子供が道徳的に熟達していく際に、所属する文化の中で学び実践を積んでいくことを重要視していた点である。そして熟達者であれば、初心者のところに学んだ道徳的原理を「なぜ？」という問いに応じて提示することができる。したがってそのような道徳的熟達者の提示する応答は、その文化の中で受け入れられた、道徳的行為を正当化するものとみなされる。

第二にクーケルバーグは、他者との対話の可能性と有用性をドレイファスが捉えていないと指摘していた。この点も同様の仕方では答えることができる。すなわち他者との対話は行為を中断することで、自分が初心者のころから採用していた原理や現在の状況についての理解を再認識しそれを提示することで可能となる。また、このような対話や熟慮は、技能的な振る舞いを手助けすると考えられていたが、この点は故障状態に陥ってしまった際の回復の手立てとして踏まえることができる。そして他者との対話は、熟達者にとって自身が採用している原理の見直しを試みるきっかけにもなる。このとき熟達者が、今まで採用してきた原理が間違っていたと考えるのなら、初心者頃に立ち返り、新たな原理を意識しつつ行為をすることが出来る。そして改めて実践を積むことで、再び行為者は熟達者としてスムーズに行為するようになる。このようにして私たちは、熟達者になった後もさらに向上を続けることができる。

3-3 知性主義との違い

以上のように先行研究における批判は、ドレイファスの初心者から熟達者に至るまでの原理や意図に注目することで応答できる。最後に、ドレイファスに基づいた経験主義と知性主義を比較することを通じて、彼の技能論に基づいた経験主義を

明確化する。

1・2で確認したように、知性主義は徳と技能が三つの特徴を持つと主張する。第一に、他者に教えることができるものであること。第二に、徳や技能には統一的な原理が存在すること。第三に、行為者は理由を示すことで行為を説明、正当化できることがあった。そしてこの時の教育や正当化は、第二の特徴である原理を示すことによって可能となると知性主義は主張する。

ドライファスはこれら三つの点をどう考えるのか。第三の特徴については、批判に応答した時と同様の仕方の説明することができる。すなわち、行為の中断を伴うのであれば、熟達者は行為の際に採用している原理や意図を明示化できる。これらを提示することで、技能的な振る舞いをする熟達者であっても理由を明示的に示すことができる。

このように原理を明示化できることは、第一の特徴である他者に教えることができるという点も説明可能とする。すなわち熟達者は、このような原理を他者に伝え、またそれを用いた実践を促すことで初心者教育できる。ただしそこで学習している初心者が熟達者と呼ばれる段階に至るためには、経験主義者が強調していた試行錯誤が必要不可欠である。

したがって知性主義とドライファスが対立するのは、第二の技能に内在する統一的な原理の存在を認めるか否かという点である。知性主義者はこれまでの二つの特徴と関連付けつつ、このような原理の存在を主張する。そしてドライファスは一見すると、知性主義による第一と第三の特徴づけを認めることから、統一的な原理の存在を認めるようにも思われる。しかし彼は、そう考えないのではないか。

というのも、第一と第三の特徴を認める際に本稿では、故障状態においてアクセス可能になる原理や意図の重要性を指摘した。しかしドライファスは、このような意図の形成はあくまで行為が中断したのちに初めて行われると考える。すなわち、知性主義者であれば技能的行為の最中も、非明示的に意図や原理がはたらいっており、だからこそ私たちはいつでも「なぜ?」という問いに答えることができると主張する。それに対してドライファスは、このような問いに応答する際に、行為の中断

を必然的に伴うという点に注意を促す。彼はこの中断を伴うことではじめて意図や原理を意識できるという特徴は、意図や原理が行為の最中に存在すると没入的対処を妨げるためだと考える。したがって、没入的対処の最中には知性主義が主張した原理は存在しない。

しかしこの、行為の最中に原理が存在しないという主張は、意図や原理の理解はあくまで事後的に形成されるに過ぎないのであり、それは行為の正当化に役立たないと反論できるかもしれない。この点に対しては、技能に熟達していく途中の段階において、行為者は一般的な原理を用いた熟慮に基づいて行為をしているという点から補うことができる。すなわち、確かに熟達した後の行為者はその最中に原理を思い出し意図を形成する必要はなく、自らの行為が「適切だ」という感覚に引き寄せられていけばよい。しかしこの時の振る舞いは、もともとこの原理に沿っているからこそ「適切だ」とみなされている。例えば「カーブに差し掛かったらブレーキを踏んでスピードを落とす」という振る舞いは「カーブに差し掛かったらスピードを落とせ」という原理に沿っているからこそ、適切な技能的振る舞いとなっている。したがって確かに、技能的振る舞いには原理が介入しておらず、行為者のその場の感覚によって導かれているが、それは初心者ころに原理にしたがって振るう際に身に着けた感覚であるために、この原理を技能的な振る舞いの正当化の根拠として提示できる。

知性主義が原理の存在を主張するのは、技能を有する人は、初めての状況でも適切に振舞うことができると考えていたためだ。ドライファスもこのような臨機応変な応答が技能に必要なだと考える。しかしながら、彼はむしろこのような臨機応変な没入的対処にとってこそ、一般的な原理は不要だと考える。というのも、私たちが日常で出会う個々の具体的な状況には、様々な要素が関連しうるためである。

例えば、車を運転する際には、周りの車の位置や道路、自分の車の状況等を踏まえて適切に車を前に進めなければならない。また、道路上でスムーズに運転するためには、これらの判断に基づく行為はスピーディーに達成されなければならない。ドライファスによると、これらの臨機応変かつスピーディーな行為の際には、そのたびごとに一般的な原理を思い浮かべ熟

慮し、意図を形成しては間に合わない。

また、特に文化と深くかわる道徳的振る舞いの特徴的であるが、行為の際に注目すべき情報を命題的に記述し尽くすことが困難だという問題点もある。適切な仕方では他人にあえて嘘をつく際には、周りの人との人間関係やその社会でどのようなことがマナーとされているかといった複雑な「雰囲気」や「常識」への応答が必要になる。こういった側面を記述し、明示化し尽くすことはや不可能だと考えられる。¹⁷したがって知性主義者は、個々の技能的振る舞いを統一する原理が存在するとしていたが、そのような原理は個々の詳細な特徴を見逃すことになるために不適切だとドレイファスは指摘する。

このように、技能を持つ人は様々な状況で適切に振舞わなければならないという知性主義者の主張は正しい。しかしドレイファス技能論によると、普遍的な原理がそこで役立つという想定は間違っている。というのも、個々の状況に含まれる情報は膨大であり、それらを統一する原理を想定するのは困難であるためだ。またこのような抽象的な原理に従うことはむしろ、道徳的な振る舞いに重要となる非明示的な「雰囲気」への応答を困難にしてみよう。

以上よりドレイファスによると、初心者学習や教育には一般的で抽象的な原理が必要になる。しかし私たちはその後、原理を意識することなく行為する能力を獲得する。それは没入的対処と呼ばれ、個々の状況に含まれる明示化不可能な要素へのスピーディーな応答である。この行為には、知性主義者が技能や徳にとって必要なものとみなしていた一般的な原理は存在しない。

とりわけ「雰囲気」への応答は、明示的な原理として記述することはできない。これは、知性主義が学習と教育が原理の伝達によって行われていると主張していた点と対立する。すなわちこのような応答は、原理に基づいて行為していた初心者から、非意識的に振舞う熟達者の段階に達して初めて可能となっている。このように原理を離れて振舞うことができるというのが、ドレイファスの特徴であり、経験主義の一つとみなす根拠となる。

おわりに

本稿では、徳を技能とのアナロジーで理解する立場を検討してきた。先行研究では、ドレイファスの技能論を徳倫理学に採用する際にいくつか課題があると指摘されている。本稿ではこれらの課題について、ドレイファスの枠組みの内でも説明が可能であると主張した。したがって本稿の議論が成功しているならば、彼の技能論に基づいた経験主義的な徳倫理学をさらに検討していくことには意義があるといえる。

しかし本稿では、ドレイファスに基づいた経験主義を擁護するというのを第一の目標としていたため、教育や熟達的重要性に注目しながら「知的な構成要素が必要か」という観点からのみ検討してきた。そのため、本当に徳を理解する際に採用する立場が経験主義で良いのかという点は、今後さらに検討を行う必要がある。また、徳には様々な特徴を帰属しうる。例えばアナスは、有徳な行為に伴う「快さ」という情動や幸福をめぐる論点も重要視している。⁽¹⁸⁾これらの点についてさらにドレイファスの枠組みから検討することで、経験主義的な彼の徳倫理学をさらに深掘していくことができるだろう。⁽¹⁹⁾

註

- (1) アナス 2019、3 頁
- (2) アナス 2019、第 2 章
- (3) Stichter 2007, pp. 184-186.
- (4) この特徴は、現代の徳倫理学者の一部と対立するとアナスも認める。例えばジョン・マクダウェルは、有徳な行為は「一般化不

可能な原理」に基づくと考える。したがって知性主義的な定義は、現代の徳倫理学者全員が同意するものではない。しかしながらこの第三の特徴づけは、あくまでプラトンやソクラテスにも連なる「技能が知的な構成要素を含む」という点から派生するものであり、知性主義の否定には至らないとアナスは考える。

- (5) Stichter 2007, p. 190
- (6) Coekelbergh 2019, p. 281
- (7) Dreyfus 2001, p. 147
- (8) Dreyfus 2001, p. 148
- (9) Dreyfus 2001, p. 148
- (10) Dreyfus 1991, 「日本語版への序文」、19－24頁
- (11) Dreyfus 1991, 「日本語版への序文」、23頁
- (12) Stichter 2007, p. 193, 194
- (13) Coekelbergh 2019, ch. 4
- (14) Dreyfus 1990
- (15) Dreyfus 1991, 「日本語版への序文」、19－24頁
- (16) Dreyfus 2007, p. 363
- (17) ドレイファスはこのような各行為を支える明示化不可能な理解を「背景理解 (background understanding)」と呼ぶ (Dreyfus 1991)。
- (18) アナス 2019、第8、9章
- (19) 本稿では、ドレイファスの技能論の中に一種の知的な要素を見出すことができると主張してきた。しかしドレイファスは、ジョン・マクダウェルとの概念主義論争において、非概念主義を掲げ、人間と動物には共通の非概念主義的基盤が存在すると主張している。この基盤を構成するのが、技能にかかわる知覚と行為である。したがって、本稿の技能に知的な要素を見出す解釈は、彼の非概念主義的な考えと対立するかもしれない。概念主義論争について検討することは、本稿の議論の範囲を逸脱する。筆者は技能にもある種の知的さは必要であり、したがってドレイファスの非概念主義に一部修正が必要ではないかという展望を持つ

いふ。

参考文献

- Amas, Julia. 1992, "Ancient Ethics and Modern Morality," in *Philosophical Perspectives*, vol. 6, pp. 119-136.
- アナス・ジュリア、2019『徳は知なり——幸福に生きるための倫理学』相澤康隆訳、春秋社
- Coeckelbergh, Mark. 2012, "Technology as Skill and Activity: Revisiting the Problem of Alienation," in *Techné: Research in Philosophy and Technology*, 16: 3 pp. 208-230.
- Coeckelbergh, Mark. 2016, "Responsibility and the Moral Phenomenology of Using Self-Driving Cars," in *Applied Artificial Intelligence*, 30: 8, pp. 748-757.
- Coeckelbergh, Mark. 2019, "Skillful Coping with and through Technologies, Some Challenges and Avenues for a Dreyfus-Inspired Philosophy of Technology," in *AI and Society*, 34, pp. 269-287.
- Dreyfus, Hubert L. and Dreyfus, Stuart E. 1990, "What is Morality? : A Phenomenological Account of the Development of Ethical Expertise," in David Rasmussen (eds.), *Universalism vs. Communitarianism: Contemporary Debates in Ethics*, MIT Press [「ハートバー・シュナイフス」スチュアート・ドレイフス、1990「道徳性とは何か——倫理的熟達の発展に関する現象学的説明」菊池理夫ほか訳、日経経済評論社『普遍主義対共同体主義』369-411頁]
- Dreyfus, Hubert L. 1991, *Being-in-the-World A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, MIT Press [「ハートバー・シュナイフス」2000『世界内存在——『存在と時間』における日常性の解釈学——』門脇俊介監訳、産業図書]
- Dreyfus, Hubert L. 2001, "The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis" in Mark A. Wrathall (eds.), *Skillful Coping Essays on the Phenomenology of Everyday Perception and Action*, Oxford University Press, 2014, pp. 146-167.
- Dreyfus, Hubert L. 2005, "Overcoming the Myth of the Mental: How Philosophers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise,"

- in *Skillful Coping: Essays on the phenomenology of everyday perception and action*, Oxford University Press, 2014, pp. 104-124. [「シャーマン・ト・ドレイフラス」 2008 「心的作用の神話の克服——哲学者が日常的な熟達者の知識の現象学からどのように恩恵を受け得るか——」 蟹池陽一訳『思想』No. 1011、岩波書店、34—79頁]
- Dreyfus, Hubert L. 2007, “The Return of the Myth of the Mental,” in *Inquiry*, vol.50, no. 4, pp. 352-365.
- Dreyfus, Hubert L. 2013, “The Myth of the Pervasiveness of the Mental,” in Joseph K. Schear (eds.), *Mind, Reason, and Being-in-the-World: The McDowell-Dreyfus Debate*, Routledge, pp. 15-40.
- McDowell, John. 1998, “Virtue and Reason,” in *Mind, Value and Reality*, Harvard University Press [「ジョン・マクダウェル」 2016 「徳と理性」 萩原理訳（『徳と理性——マクダウェル倫理学論文集』大庭健監訳、勁草書房） 1—42頁]
- Stichter, Matt. 2007, “Ethical Expertise: The Skill Model of Virtue,” in *Ethical Theory and Moral Practice*, vol. 10, no. 2, pp. 183-194.

（九州大学大学院・博士後期課程）

